

# 人生の

# 道しるべ

あなたの悩みに答えます

森本あんり

(国際基督教大学教授)

一九五六年、神奈川県生まれ。プリンストン神学大学院博士課程修了(P.H.D.)。著書に『反知性主義』(不寛容論)、『すれも新潮選書』など。

写真 遠藤 宏



## 相談 人生の有限性にどう向き合おう??

教育関連の専門職をしている者です。時折、人生の有限性に悩むことがあります。私はいま独身ですが、好きな仕事に就き、毎日を比較的楽

しく過ごしています。

ただ、仕事で新しくやりたいことがあっても、日々の業務に忙殺されてなかなか取りかかれません。

プライベートでは読書や映画鑑賞が趣味なのですが、読みたい本や観

たい映画が次々と湧いてきて、消化しきれない。店頭で興味を抱いて購入したものの、結局手をつけずに放置されたままの作品も少なくありません。自分は飽き性で気分屋な性格だと自覚しています。

いろいろな物事に興味をもつだけに、自分が人生で楽しめる範囲は限られていると思うと、虚しい気持ちになります。

「人生の時間は有限なのだから仕方ない」と割り切ればよいのかもしれませんが。しかし、それでは自分の可能性を狭めてしまうのではないかと感じます。

人生の有限性にどう向き合えばよいでしょうか。

(東京都、三十代男性、会社員)

## 回答

いただいた文面から、相談者のプロフィールをこんなふうに想像してみました。

教育関係だが、会社勤めということなので、直接教壇に立つ学校の先生ではないらしい。専門職ということとは、営業や庶務ではなく教育のコンテンツに関わるお仕事で、担当する業務には日常的な創造の努力が求められている。だから日々の業務をこなす以上に、新しい企画や目標を立てて向上をめざさなくてはならない。それは自分でもわかっているのだが、なかなかそういう時間がとれない。

とはいえ、ご相談は仕事のこと

はないようです。教育という業界には、ルーティンワークをこなしつつ、新たな取り組みも必要で、全体として要求される業務量が多すぎて疲弊している、という人はたくさんいます。もしお仕事のことで疲労困憊しているなら、「好きな仕事に就き、毎日を比較的楽しく過ごしていきます」とは書かないでしょう。

一方、プライベートでは三十代で独身、好きな読書や映画を満喫する生活のようです。でも、読みたい本や観たい映画がたくさんありすぎて困る。あれもこれもと興味を惹かれて手を出すが、飽きっぽい性格なのか、結局時間がなくて放置してしま

う。そこでご相談は、人生の有限性を

どう受け止めるべきか、ということですが。やりたいことができなくても、仕方のないこととして受け入れればいいのか。でもそれでは諦めにつながり、自分の可能性を狭めてしまいうことにならないか。

以上の予診が正しいと仮定して、まずはこの主訴についてお答えしておきましょう。

人生が有限だと割り切ることは、自分の可能性を狭めることにはなりません。だって、それをどう受け止めるにせよ、人生が有限であるという事実が変わりはなく、あなたの時間は増えもせず減りもしないからです。だからできることの総量も同じです。いやむしろ、割り切ったその事実を受け入れたほうが、時間を計

画的に使うようになって、できることが増える、とすらいえます。

ところで、人生の有限さを嘆く人はいつの世にもいますが、この相談者の悩みには、もう少し現代日本という特定の文脈が影を落としているようにも思います。寄せられた文面を読みつつ、私は自分の世代との違いを強く感じました。

私が見てきたのは、いわゆる「モーター」世代から「ロスジェネ」世代です。高度成長を支えた企業ニッポンの戦士たちにとり、仕事は二十四時間三六五日のものであって、余暇を楽しむなどは二の次三の次でした。やりたいことをお預けにしまま、脇目もふらず、自分と家族のためひたすら働き続ける。

でも受け止め方により違いが生じることはあります。「運命は望む者を導き、欲しない者を引きずる」(セネカ)。同じ運命でも、嫌々引きずられるか、それとも竜を乗りこなして天にまで昇るか。相談者はむしろ後者なのでしょう。

あるいは、もしかするとこの相談にはもう少し別の問いが隠されているかもしれません。ご本人も認識していない、あるいは言い出せないでいる問いです。

三十代といえば、周囲はふさわしい相手を見つけて落ち着き、家族の将来像を描いて計画的な生き方を始めるころです。

とすれば、これはアリとキリギリスの話になります。つまり、キリギ

あまりに長く我慢し続けてきた結果、いざ自由な時間が訪れる歳になっても、自分がほんとうは何をやりたいかあったのか、もう思い出せない。

極めつきは、そういう虚しさで焦りに悶々としながら家でゴロゴロしているとき、妻や娘に言われる一言。「お父さんで、ほんつと無趣味ね」「仕事ばっかりで、他になんにも面白くない人ね」——。

こういう人は、私の世代には案外多いのではないかと思います。それに比べると、相談者の悩みは何とキキラ輝いていることか。

一方、相談者の世代からすれば、自分たちは生まれながらに「失われた世代」です。バブルははじめから崩壊しており、格差は広がるが成長リスのような自分の生き方をこれからも続けていて大丈夫なのだろうか、という不安のよぎる問いです。

アリだらけの世代を過ごしてきた私に、お答えする才覚はありません。でも、そういう時代の終わりとともに、伝統的な家族の姿でないと幸せになれない、という時代は終わっています。もしこの想定が当たっている場合には、全世界に向かって「キリギリスで何が悪い！」と開き直りましょう。



## 投稿要領

日常の相談事や悩みについて、400字詰め原稿用紙1枚程度で、住所、氏名、年齢、職業を記入のうえ(掲載は匿名)、ご送付ください。掲載分には、図書カードを進呈致します。原稿は、内容を損なわない範囲で、一部を修整させていただく場合がございます。原稿は返却できません。掲載分は電子メディアや出版物などで公開する場合がございます。あらかじめご了承ください。

### 宛先

〒135-8137 東京都江東区豊洲5-6-52 NBF豊洲チャンネルフロント11階

株式会社PHP研究所 Voice編集部 人生相談係

メールでも投稿を受け付けております。

voice@php.co.jp

は止まったままの三十年です。終身雇用の保障はとうになく、会社はそもそも忠誠や献身の対象ではありません。だから仕事以外の道で自己充実を図るのは当然のことなのです。

相談者の問いに戻りましょう。人生の有限性を受け入れるべきか。もしこれに否と答えるなら、どういう道が残されているのでしょうか。そんな物わかりのよさを捨てて、あくまでも運命の定めに逆らい、欲望の赴くままに次から次へと取っては捨てる。そういう自由奔放で無責任で環境負荷の大きい生き方をする、というのでしょうか。

先に私は、どういう答えを出しても人生が有限であることに変わりはない、と書きましたが、事実が同じ